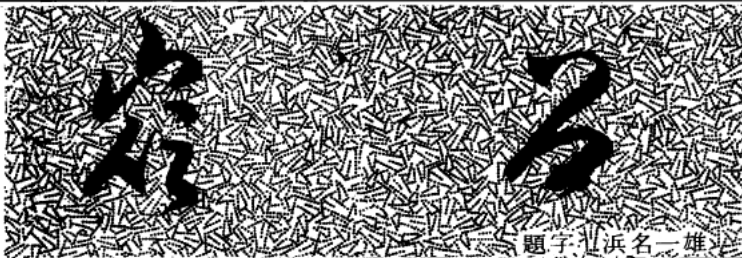


第35号 昭和63年4月15日

発行者 群馬県山岳連盟
〒371 前橋市大手町1丁目1-1
TEL (0272) 23-1111
群馬県庁観光課内
編集者 群馬県連編集委員
責任者 野田 順一
印刷所 田 野 印 刷
定価 1部 100円



題字 浜名一雄

アンナプルナ南壁冬期初登攀

群馬県

冬季アンナプルナI峰

登山隊

隊長 八木原 罔 明



私共は岳連の皆さんをはじめ、県内外のたくさんの方々の御支援、御協力を頂きまして、昨一九八七年十二月二十日、午後三時十七分、アンナプルナを南壁ルートより四名が登頂に成功することが出来ました。厚く御礼を申し上げます。

ただ何とも口惜しく、残念なのは登頂に成功した小林俊之君と斎藤安平君の下山中の転落死亡事故です。二君にはもちろん、残された御家族の方々にも誠に申し訳なく思っております。

しかし、今回の南壁登山は、世界のヒマラヤ登山史の中で、冬の八〇〇〇メートル級の岩壁登山成功という、先駆的な一ページを彼等自身が自らの手で切り拓いたことは間違いの無い事実であります。

このことについて、私共は二隊員を失ったことで完璧な成功を成し得た、とはもちろん考えてはおりませんが、全てが相殺されてゼロになるわけでは無いことも確信しております。

全隊員が一丸となって冬の岩壁

に向かい、闘い続けたものであり、山田、三枝の二隊員は無事生還しております。

冬の八〇〇〇メートル級の岩壁という、極限の世界で勝ち取ったという事実、また小林、斎藤君のような事故も起り得ることは過去の登山史の中でも、また身近なところでも数多く見聞きしております。

だからこそ私達は生活を賭け、命をかけて困難なヒマラヤの山々を登り続けている、ということでもあります。

小林、斎藤君を失ったことは厳粛な事実として、残された私達が受け取らなくてはなりません。とにかく、「困難に打ち勝って登った」と私自身が言わなくては、彼等も、また第二次アタック隊としてC3に控えていた隊員、その他隊員達も救われたいと考えます。

アンナプルナ登山の報告にあたり、先ず本登山のいきさつや当時の状況等から申し上げたいと思つて、一九七八年(昭和五十二年)秋、田中成幸現岳連理事長を隊長とし



るようになった斎藤安平を入れると、十八名中、十名ということになる。

このダウラギリI峰北壁登山は一九七五年のIV峰、一九七九年のII、III、V峰の縦走登山成功により、次にI峰(主峰)に登ることにより、「カモシカ人によるダウラギリ山群の全山登頂」という大目論見の大きなステップとして計画されたものであった。

参加した岳連会員は、石川忍、宮崎勉、松永幸雄、山田昇、鈴木繁、阿久沢芳雄、金井敏夫、佐藤光由、八木原それと斎藤安平を入れると合計十名であった。

そして山田、斎藤、小松幸三が登頂し、小松はI峰からV峰までの五座登頂を果たした。

冬のアンナプルナ南壁登山計画は、二十七日間で、過去九隊が退けられ続けていた北壁・ペアールート初登攀に成功した帰りの「ダウラギリI峰北壁・ペアー」の初日が始まった。

ネパール政府は一九八〇年から冬のシーズンオープンすると発表したが、その中で早くも、あたかも政府を押し切ったような形で、ポーランド隊が一九七九年(十二月三十一日)にB建設から一九八〇年にかけての冬にエベレストへ行き、二月十七日に成し遂げってしまった。

ポーランドはこれまでに、一九七三年にヒンドウ・クシユのノシヤック、七四年のロツツエとすでにヒマラヤ冬期登山の実績があった。

翌年冬には植村直己を隊長とするエベレスト隊、アラン・ラウス隊長のエベレスト西稜隊、坂下直枝の単独によるアンナプルナ北面などが試みられたが、いずれも寒気、烈風などにより退けられてしまった。

これらにより、これからのヒマラヤ登山の潮流が、より自然条件の過酷な「冬期」に大きく向うであろう、と考えた私共は「八〇〇〇」の「パリエーション」からの登頂に、「冬期」を加え、この三つの大条件を前提に計画を練り直し、推進することにした。

冬の厳しさは、八〇〇〇メートル以下にはあまり無く、八〇〇〇メートルを越えた山にしか、本当の冬の厳しさは無いからである。

それはその後の登山を含めてであるが、殆んどどの隊が七〇〇〇メートル台までは比較的短時間のうちに、容易に到達していることからも証明されている。

冬への潮流はすでにこのように大きく動いており、私共の「ペアー」

ルート登山のすぐ後に冬にも、日本隊だけで三隊の計画があった。一つは山田昇を隊長とする日本ヒマラヤ協会がマナスルへ、ダウラギリI峰のノーマルルートである北東稜へは北海道大学としてエベレストへは加藤保男を隊長とするイエティ人隊が日本人による冬期初登頂をねらって、先陣争いに入ろうとしていた。

そして一九八三年(八四年冬)のカモシカ人によるエベレスト隊に副隊長として参加することになっている宮崎は、やろうとしていたクンブでのエベレストの観察をとりやめ、鈴木繁とともに加藤隊へ現地参加することになった。

話を戻して、ペアールートからの「ダウラギリ」の初日、エベレストの西壁、ロツツエ南壁、マカール北西壁、ダウラギリ南壁等の候補の中から、ターゲットをアンナプルナI峰南壁にし、カトマンズの登山隊解散後に阿久沢、金井、佐藤を偵察に向かわせることになった。

アンナプルナにした理由は、前者はあまりに困難が予想され、当時考えられた群馬のメンバーではあまりに荷が重すぎる、と思われた。

ダウラギリへは過去、群馬岳連でIV峰とI峰、カモシカ人でも私達が参加してやはりIV峰とI峰に登っており、「またダウラギリか」という感じが強く、この山群から離れたかった、ということもあった。

そして私自身が隊長となるので

表したが、その中で早くも、あたかも政府を押し切ったような形で、ポーランド隊が一九七九年(十二月三十一日)にB建設から一九八〇年にかけての冬にエベレストへ行き、二月十七日に成し遂げってしまった。

ポーランドはこれまでに、一九七三年にヒンドウ・クシユのノシヤック、七四年のロツツエとすでにヒマラヤ冬期登山の実績があった。

翌年冬には植村直己を隊長とするエベレスト隊、アラン・ラウス隊長のエベレスト西稜隊、坂下直枝の単独によるアンナプルナ北面などが試みられたが、いずれも寒気、烈風などにより退けられてしまった。

これらにより、これからのヒマラヤ登山の潮流が、より自然条件の過酷な「冬期」に大きく向うであろう、と考えた私共は「八〇〇〇」の「パリエーション」からの登頂に、「冬期」を加え、この三つの大条件を前提に計画を練り直し、推進することにした。

冬の厳しさは、八〇〇〇メートル以下にはあまり無く、八〇〇〇メートルを越えた山にしか、本当の冬の厳しさは無いからである。

それはその後の登山を含めてであるが、殆んどどの隊が七〇〇〇メートル台までは比較的短時間のうちに、容易に到達していることからも証明されている。

冬への潮流はすでにこのように大きく動いており、私共の「ペアー」

ルート登山のすぐ後に冬にも、日本隊だけで三隊の計画があった。一つは山田昇を隊長とする日本ヒマラヤ協会がマナスルへ、ダウラギリI峰のノーマルルートである北東稜へは北海道大学としてエベレストへは加藤保男を隊長とするイエティ人隊が日本人による冬期初登頂をねらって、先陣争いに入ろうとしていた。

あれば、なおのこと成功率の一番高いアンナブルナの南壁とし、その中で最も可能性の高い、ボンントンルートとしたのである。

冬に長いルートを時間をかけて登るためには、ジェットストームの風の影響を受けない「内院を形成している山」が良いであろう。

雪もそれ程は降るまい、と考えた。そしてその年の冬期登山は、山田のマナスルでは隊長である山田自身が、登山活動初日にヒドン・クレバスに転落して足首を骨折し、自身の活動が不能になってしまった。

挙句にアタックに出た隊員のうち一名が、強風などにより登頂を断念しての下山中に転落死し、不成功となった。

宮崎の参加した加藤保男隊では、小林利明とアタックに出た加藤が単独登頂し、三シーズン登頂に成功したものの、小林と合流してのピヴァーク中にもともども行方不明になってしまった。

北海道大学隊のみが完全に登頂成功という結果であったが、この成功には少し釈然としないところが残った。

というのは、秋のうちに通常の登山隊のベースキャンプを「レスト・キャンプ」と称し、その上のアイスフォールを越え、ベースキャンプを六〇〇〇メートル近い、五九四〇ぶという高所である北東コルに作っての登頂ということであった。

このBCの位置については、以前にもネパール人を雇用する場合

の保険や資金、装備の支給の問題などからみ、多少の論議がされたことがあった。

規則がある訳ではないので、自分達で「ここがBCである」と言え、荷上げ量の一番多い下部のキャンプに、そういった名目でのポーターやシェルパを雇えるのではないかと、というものであった。

しかし、それも常識論の中で認められることなく、消えて行ったといういきさつもあったのである。

一九八三年十二月、カモシカ同隊によるエベレストの南北同時登頂計画には、南側に宮崎が副隊長、北側に山田が隊長、鈴木が隊員として参加した。

北側には三枝照雄が隊員、斎藤安平が撮影隊員として参加。北側のいわゆるチョモランマは登頂出来なかったが、南側の山田が冬のエベレストに登頂を果たした。他には尾崎隆、村上和也、ナワン・ヨンテンと一緒に登頂した。

この登山で戦略家としての宮崎の評価が日本国内で定着したと言っている。これらの冬の経験を踏まえて、一九八四・八五年に私共がアンナブルナの南壁へ挑んだのであった。

（群馬岳連報「嶺呂」二十三号、二十五号、山と溪谷五八八号「報告書 ANNA PURNA 等参照」）

その時の反省点としては、失敗

の最大の理由としては人為的なもの、つまり隊員の力不足、気力不足であり、その他に数度に及ぶ大降雪、シェルパに関する不運な事故も災いしたが、その人選の失敗などであった。

失敗したとは言え、技術的には決して登れないルートではない、と強く感じた私共は近い将来、必ず雪辱を果たそう、と決意を新たに準備に入った。

一月に帰国した私に持ち込まれたのが「植村直己物語」のエベレスト撮影隊長の話であった。

ヒマラヤ登山を成功させるには、ヒマラヤ登山をより経験させることが最も必要であると考えていた私は、撮影隊長を引き受け、宮崎と山田とともに、次のアンナブルナ南壁へ続く群馬岳連合会中心のエベレスト撮影隊を組織した。

宮崎副隊長、山田登攀隊長の鉄壁の布陣、隊員が名塚秀一、三枝照雄、佐藤光由、小林俊之、八木原とカメラン助手の斎藤安平を入れての撮影登山隊はカメランを含む十一名中、八名が岳連合会という構成となり、私の思惑通りの結果を得ることが出来た。

カメラを持たせたシェルパが酸素器具の不調で途中から下山したため、頂上での撮影は出来なかったものの、七名がエベレストの登頂に成功した。

そのうちの五名が岳連合会であり、やはり酸素器具の故障で惜しくも登頂を逸した斎藤は南峰直下まで行き、下降してしまっただけで、当時十九才の群大生であった小

林には登頂のチャンスを与えなかったが、約八〇〇ぶのサウスコルまでは睡眠中の酸素使用のみで二度到達し、立派に任務を果たしたのであった。

若く、まだ経験の浅い彼が、いくら酸素を吸ったとは言え、自分一人の力で登り、確実に帰ることには不安があったからであった。（エベレスト登山については群馬岳連報「嶺呂」二十九号、三〇号参照）

宮崎は前回のアンナブルナ登山の反省の上に立ち、迅速かつ悪天候にもつかまらずに、安全に登るためのタクティクスを再考、再構築をした。

眼目は登山期間を十五日間前後とする短期速攻である。冬のアンナブルナの南壁を十五日間で登るというのは、全隊員が全て足並のそろった豊富なヒマラヤ登山経験者ではないだけに、やはり大胆な計画であったと言えよう。

しかし、一番の問題である天候のことを考えれば、先ずこれを大前提とすべきである。我々の経験と実績をもつてすれば可能であるとする宮崎は、それを達成するための方策として、充分なる高所順応計画を立てた。

もう一つはBCをもつ南壁に近づけ、キャンプ数を減らし、なおかつたとえ降雪があっても、安全に入力、二月中旬までの食糧を完全に長期戦に耐えられる地点へのキャンプ建設であった。

前回の経験者達からは、C2、C3間の標高差があり過ぎるのでないか、という意見も出されたが、宮崎はそれを押し切り、可能

である、と断じた。実際にそれは成功への一要因となった。

前回は七七〇ぶの第六キャンプをアタックキャンプとする予定であったが、さらにキャンプを一つ減らし、同地点を第五キャンプとするものである。

初登攀を成し遂げた一九七〇年のボンントン隊は、そこを第二キャンプ地点としていたのである。キャンプを二つ減らすことになっ

た。十二月前半というのは、十一月からこの頃までが一年のうちで、最も天候の安定する時期であり、厳密に考えれば、冬期登山ではな

い、とする私共の印象はぬぐい去れない。

しかし、現段階としては、一月、二月の冬の真最中の登山は困難すぎるため、次の厳冬期登山へのワンステップである、という考え方があった。

クリス・ボンントン著「アンナブルナ南壁」を読み、前回の経験の上に立てば、無駄な装備などを準備することもない。それらを十分に検討した上で宮崎の戦略であった。

それでも慎重の上にも慎重を期し、十五日間で完登出来なかった場合、一月までズレ込むことも考慮に入れ、二月中旬までの食糧を用意した。

長びくという理由には、降雪にやられる、ということである。ロープや登攀具が雪に埋没し、使用不能になり、ルート工作のやり直しを迫られる可能性があるため、

倍の数量を用意した。前回は今回も、私は隊員達にこ

う繰り返して言い続けて来た。「我々は一九七〇年当時のボンントン率いたイギリス隊と較べれば、ヒマラヤにおける経験と実績は、彼等とは比較にならない位、上である。しかも寒気は多少ゆるいかも知れぬが、彼等は冬とは比較にならない程の降雪量に苦しめられながら、春に登っている。それらを考え合わせれば、我々に登れないはずがない」と。

事実、ヒマラヤ登山隆盛への緒

についたばかりの、当時のイギリス隊のヒマラヤ経験はと言え、アンナブルナ南壁、ドゥン・ウイランスのマッシュアルム他の三回他、延べ十回に満たないものであった。

もちろんあの時代にヒマラヤ登山の鉄の時代という、新しい時代を開く登山隊に参加するような登山家である。アルプス他の困難な登攀の経験はもっていた。

私達の側は、今日の場合、星野総隊長と藤田ドクターを除く十二名の経験は、マッキンリーなどは除く、ヒマラヤ地域だけで延べ六十回を数える。星野総隊長の前回のアンナブルナを入れれば、六十一回ということになる。

十七年という年月が過ぎた今、初登攀のロープやハーケンが使えない訳ではない。その意味では技術的な困難性にはないが、彼等の記録を参考に出来、岩場に残留するロープなどがルートは教えてくれ

る。この後の記録は三十六号へ。



かくされた山 ②②

赤城山の秘境 赤城の七不思議

群馬県中高年山岳会

赤城山外輪山内壁にある火口湖、小沼を水源とする粕川の溪流が刻んだ一つの大火口瀨であります。粕川の激流はこの大火口瀨の大岩にぶつかり、その激流の姿が大岩の胎内に消えてゆきます。そして大岩の下部より又、流れ出て来ます。実に不思議な光景です。この大岩の胎内はくり抜ける事が出来ませんが、衣服の濡れることは覚悟しなければなりません。又、この付近はカモシカの生息地でもあります。木の葉の散る晩秋の頃はよく見られます。冬期は三〇〇米の水深にいとむ若人の姿も見られます。

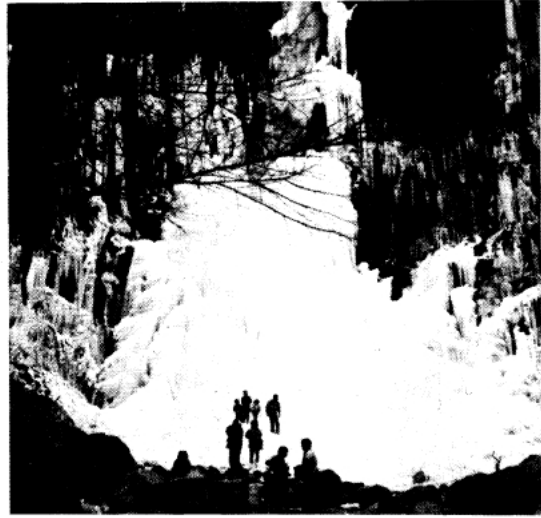
② オトギの森
粕川の溪流に沿って銚子のガラの頂点より五〇〇米ばかり粕川を遡行すると、静かな台地にミズ

③ 血の池
オトギの森より広い道を北に歩

④ 三途の川
血の池の北側に赤城温泉に降る

⑤ ガキボツタ
三途の川より西に一〇〇米ばかり

⑥ 賽の河原
ガキボツタより二〇〇米ばかり



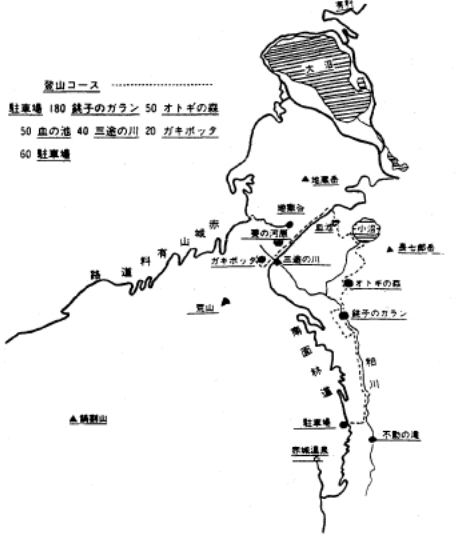
① 銚子のガラ
幸いです。

明治の晩年、東京の文人がこの地を訪れて、このミズナラの自然林の神秘的な雰囲気、心を打たれた。童話の七人の小人にあるオトギの森も、かくやあらんと、このミズナラの森をオトギの森と名付けたといわれています。

⑦ 地獄谷
賽の河原の北方にあり、地蔵岳

⑧ 赤城の七不思議登山コース
昔は粕川の滝沢不動の大滝の岩

今後この赤城の七不思議を観光協会等の協力で登山道を作り、昔の再現が出来れば素晴らしいと思



群馬中高年山岳会はこの秘蔵を一般の人達や中高年の人達に登っていただいたくこの赤城の七不思議の場所や、謂をコース順に説明し、皆さんの登山に参考となれば幸いです。

群馬中高年山岳会顧問
山口丑太郎

我が群馬中高山山岳会

顧問 山口丑太郎

○群馬中高山山岳会の結成由来

若壯年者と一緒に岩登りや、沢登りを楽しんで来た山男も、中高年ともなれば、脚力の衰えや、体力の限界で、やがては山の仲間達と別れる運命にある。そんな時マッカーサーの言葉ではないが、山男は「老兵は消える」と山の世界から消え去ることが出来るだろう。

山男は七十才になっても、八十才になっても、九十才になっても山を忘れることの出来ない宿命にある。

私も十三才より山登りを始めて、登山歴六十五年、現在七十八才です。最早、岩登り、沢登りは出来ないが、高山や岩山なら登れるし、登りたいと思ふ。

山男は誰でもこんな気持ちではないだろうか。然し中高年者の山岳会がなければ単独山行となる。高令を考えれば、そこには危険の伴うおそれがある。中高年者の山岳会がほしいとは、中高年者の誰かと思つてゐることと思ふ。

偶々昭和五十八年一月七日付、上毛新聞の読者役書欄「ひろば」によせられた高崎市在住の当時五十六才になる女性の、「山国の群

馬県に何故中高年山岳会がないの

でしよう、誰か中高年山岳会を作つて下さい」という訴えが、群馬中高山山岳会結成の導火線であった。

投票の全文は次の通りです。山登りを始めてまだ四年しかなく、それも前半は数える程度でしかないのに、「中年で覚えた何とやらは死ぬまで止まらな

い」とだれかが言つたように、いわかに燃え上がった山熱は、いよいよ燃え盛るばかりである。

四州を山に囲まれたこの恵まれ、た上州の地で、私の不満は中高年山岳会のないことである。若い人ならともかく、私達の年令になる

となかなか山友は得られない。そこで、山岳会と名の付くところに

てみて、同行者を好まぬ単独行者ばかり。やむなく東京の中高山岳会に入り、ようやく念願を達した。

この一年半、同年配の人達と本当に楽しい山行を堪能した。気兼ねのないこんな素適な登山が出来たのに、そして各地に出来ているのに、何故山国上州に無いの

中高年だつて高山もやれるし、むしろむちやをしないから安全な

に、老人はオミットとは情けない。ABコースに分けて体力に

じた登山をするなら、老いらくだつて十分楽しめる。どなたか中高年専門の山岳会を作つて下さる方

はいらっしゃいませんか。以上この役書が発端となり山のOB

受ける様な、無謀な山行はやるべきでない。

くまでも山を愛し山を理解して、自然に親しみ、脚力に応じて山に登り、又脚力に強弱ある者はお互いに助け合い、和気あいあいと八十才、九十才までも健康であり、山行を楽しむ。このような心で山に登る時は、山も又吾々を暖かく抱擁して、人と山のコミュニケーションに依り、楽しく安全な登山が出来た。これが群馬中高山山岳会が理想とする登山理念である。

昭和六十年一月十一日に発生した那須岳の遭難死の惨状をくり返してはならない。三十七才の男性リーダーのもと、那須岳に

雷中登山し、五十三才の女性が凍死し、山岳雑誌「山より」、これ

でいいの中高年登山」と批判を受ける様な、無謀な山行はやるべきでない。

○群馬中高山山岳会の現況
群馬中高山山岳会は昭和五十八年四月一日に結成以来、毎月其の登山状況が会員により上毛新聞紙

上に「よみがえる青春をおう歌して五十才以上の山岳会誕生」と大々的に掲載され、多くの人の注目をあび、山岳会結成以来三ヶ年

を経過した現在、会員も全県下に広がり、次の通り県下に九支部が結成されております。

九勢多地区
会員数は男性七十名、女性八十名、合計一五〇名、会員の最高年齢は八十二才の女性で、登山歴三十年、登った山は三〇〇以上のペ

テランです。東京の「おいらく山岳会」の会員でもある。

○群馬中高山山岳会の山行歴
群馬中高山山岳会は、山が好きで山を愛するが故に山に登り、会

員相互の健康と親睦を願う人達の山岳会であるため、登山回数も多く、昭和五十八年四月一日結成以来の年度別山行実施回数は左記の通りです。

昭和五十八年度
浅間隠山・湯ノ丸山・谷川岳・八ヶ岳・至仏山・苗場山・その他合計十六回の山行。

昭和五十九年度
日光鳴虫山・尾瀬燧ヶ岳・南ア北岳・間ノ岳・農鳥岳縦走・黒斑山・武尊山・巻機山・庚申山・其の他合計三十回の山行。

昭和六十年度
袈裟丸山・裏妙義山・苗場山・平標山・甲斐駒ヶ岳・四阿山・その他合計三十九回の山行。

○群馬中高山山岳会今後の展望
山男のOBが八十才、九十才になつた時でも、群馬中高山山岳会が存在する限り、山のロマンは生きつづけると思ふものである。

又群馬県には登山可能な山が約三〇〇ある。この山を全部登つた山岳会は未だ無い。群馬中高山山岳会が最初に完歩するのが夢である。そして究極の山をさがしに

.....

昭和六十二年十月二十五日(日)倉洲村、浅間隠山、角落山を会場とする沢山の関係者により六十二年六月二十七日(土)厚生年金会館にて開催され盛大でした。

登山し、山の自然に親しむと共に登山の喜びを味わい、健康と体力の保持増進を図る事を趣旨として、群馬県、群馬県教育委員会(財)群馬県体育協会、群馬県スポーツ振興事業団、倉洲村、倉洲村教育委員会、倉洲村体育協会、倉洲山岳会、の後援により、開催し、午

前六時より受付、七時から開会式(赤城山)・「伊香保の嶺呂」(榛名山)などと呼ばれております。

後、Aコース(西南尾根コース)、Bコース(一倉尾根コース)、Cコース(白沢・角落男坂コース)、Dコース(白沢・北倉沢・角落男坂コース)、Eコース(袈裟丸・雨ん坊主・中垣岩コース)の各コースに別れ、各コースリーダーの指示の下で、役員、一般参加者、登山教室受講生を含めて一六九名の参加で、当日は晴天に恵

まれ、各コースとも事故もなく無事終了しました。

高開催に特別御協力いただいた倉洲村、はまゆう山荘、倉洲山岳会に対し、県山岳連盟より感謝状を贈呈いたしました。

石井謙一郎副会長
群馬県総合表彰受賞

山岳連盟石井謙一郎副会長が去る六十二年五月一日群馬県総合表彰を受賞されました。この受賞は私共岳人にとりまして喜ばしく今後の励みになるものです。心よりお祝いたします。又石井副会長の祝賀会が星野岳連会長を初めとする沢山の関係者により六十二年六月二十七日(土)厚生年金会館にて開催され盛大でした。

嶺呂のいわれ
嶺呂とは、万葉集の中に出てくる言葉で、嶺は、山々・峰々の意味で、呂は親愛・感動の念をこめて使つた接尾語です。万葉集上毛野の歌の中に、「久呂保の嶺呂」

命名者は浜名会長です。久呂保の嶺呂は、黒々とした山頂付近の針葉樹林を遠望しての呼び名で、伊香保の嶺呂は、いかつい大きな山々の意味で、保は高くそびえている様子をあらわし、いずれも麓の人々が、親愛をこめて呼んでいたようです。群馬岳連の会報の名にふさわしいと思ひます。

三回の山行。

前橋山岳会会長・岳連常任理事 大井 清氏
 ミヤマ山岳会会長・岳連評議員 柴田義孝氏
 吾妻山岳会会長 川村尚雄氏
 群馬中高山岳会会長 望月新吉氏
 御逝去される

理事會公報

總務局長 女屋

文責

部會報告

山岳部

自然保護部

山岳救助部

昭和六十二年七月一日群馬中高山岳会会長の望月新吉氏が胃疾患で御逝去されました。告別式は七月三日に執り行われました。

前橋山岳会会長・岳連常任理事、大井清氏(六十一才)は、急性心不全のため御逝去されました。告別式は一月六日(水)に執り行われました。

御三人の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

昭和六十二年七月一日(金)に年山岳会会長の望月新吉氏が胃疾患で御逝去されました。告別式は七月三日に執り行われました。

前橋山岳会会長・岳連常任理事、大井清氏(六十一才)は、急性心不全のため御逝去されました。告別式は一月六日(水)に執り行われました。

御三人の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

御三入の方々は生前岳連及び我々会員の先輩として公私共々御指導いただいた岳連にはなくてはならない方々でした。大変残念でなりません。心より御冥福をお祈りいたします。

昭和六十二年 総会報告

昭和六十二年六月十四日(日) 群馬県自治会館

星野、小林、石井、田中、太田、樋口、大井、羽野、岡安、水野、竹山、大沢、高田、松田、村上、長谷川、須田、松永、高山、笠原、黒崎、北村、堀江、女屋、柴田、木村、田島、阿久沢、中島、高橋、武井、阿部健、土屋、鈴木、阿部源小此木

委任状 中島、菊地、寺内
 委員 中島、菊地、寺内
 委員 中島、菊地、寺内

○監査報告(堀江)
 ○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

昭和六十二年六月十四日(日) 群馬県自治会館
 星野、小林、石井、田中、太田、樋口、大井、羽野、岡安、水野、竹山、大沢、高田、松田、村上、長谷川、須田、松永、高山、笠原、黒崎、北村、堀江、女屋、柴田、木村、田島、阿久沢、中島、高橋、武井、阿部健、土屋、鈴木、阿部源小此木

委任状 中島、菊地、寺内
 委員 中島、菊地、寺内
 委員 中島、菊地、寺内

○監査報告(堀江)
 ○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

○六十二年度事業計画及び予算
 ○六十二年度事業計画及び予算

団体当りどのくらいか、また日山協の負担金は岳連会費とは別に徴収したかどうか。
 ○群馬の山の販売で予定している収入額はいくらか。

五月十七日(日) 谷川岳雪上技術講習会
 六月十四日(日) 榛名山黒岩岩登り講習会
 八月二十六日(水) 天気図講習会
 九月十二日(土) 一十三日(日) 山岳スキー技術と雪上生活技術遭対部、四月十七日(日) 妙義ロックガーデンで救助訓練
 五月二十四日(日) 一般対象の救助講習会をロックガーデンで行なう。(西山)

○群馬の山販売について 来年は奥利根・上越の調査、上越は登高会、奥利根は境町山の会に依頼してある。その他はミヤマ、松井田が研究しているので加わっていただきたい、県央部については高体連、太田に依頼(川辺)

○事務局 会計で非常に財政状況がきびしい。加盟団体の減少傾向がある。
 ○県体協加盟競技団体理事長会議報告(女屋)

○海外登山部 本年のアンナプルナ遠征について総会後に実行委員会を発足させた。(石川、松永)

○海外登山部 本年のアンナプルナ遠征について総会後に実行委員会を発足させた。(石川、松永)

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催
 ○国体部 七月二十四日から三日間、茨城県で関東地区大会開催

のめどができた。(川辺)
 ○カレンダー作成について
 写真を七月十八日に締め切り、
 一五〇部より選考(須田)
 ○日本登山医学研究会シンポジウムの後援について
 第八回昭和六十三年のシンポジウムを群馬県で六月に開催する。田中が担当、岳連の後援と会場確保等の協力をお願いしたい。

阿久沢、三枝、神戸、弥野、小林、名塚、木村
 ○会長あいさつ。
 ○カレンダー販売、発行部数一〇〇〇部、価格は一〇〇〇円、十月の理事会で配布。(須田)
 ○県民登山大会について
 コースは四コース、期日は十月二十五日。大会役員の決定。(田中理事長)

(田中壮佳)
 ○全日本登山体育大会について
 九月十三日―十五日神奈川県が主管で開催。(田中理事長)
 部会報告
 ○編集部 次号の嶺邑は予定を少々変えてアンナプルナ登山の計画を大きく取り上げたいと考えてある。(羽野)

○登山教室開設 (講義) (実技)
 期日 昭和六十二年十月十三日
 会場 県スポーツセンター内
 指導者・助手 水野、高田、松田、日向野、清水、田島
 期日 昭和六十二年九月九日(内)
 場所 群馬県体協会館
 出席 田中、樋口、川辺、岡安、大沢、高田、村上、松田、長谷川、須田、松本、富山、笠原、八木原、宮崎、女屋、阿久沢、田中壮、原田

○自然保護部 尾瀬のゴミ持ち帰り運動を実施。参加人員は十八名。(富山)
 ○国体部 七月二十四日―二十六日茨城県で国体関東地区大会が開催された。群馬の成績は、成年男子(登攀)トリオ三位、ベア一位、総合一位。
 成年女子 群馬は不参加
 少年男子(踏査・縦走)
 少年女子(踏査・縦走)
 踏査二位、縦走四位、総合二位
 少年女子(踏査・縦走)
 踏査四位、縦走四位、総合四位
 (田中)

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

局は、山とスキーの店石井と決定、事務局長に石井謙一郎(須田)
 ○総務部 チャリティゴルフの参加報告
 群馬県生涯学習センターのスポーツ部門の人材バンクの登録者は、石井副会長、田中理事長、樋口副理事長、羽野、富山、西山、八木原、高田、水野に決定。(高田)
 ○登山教室開設 (講義) (実技)
 期日 昭和六十二年十月十三日
 会場 県スポーツセンター内
 指導者・助手 水野、高田、松田、日向野、清水、田島

○登山協自然保護委員会総会十月十七日(土)―十八日(日)に福島県で開催。富山、笠原、寺内常任理事参加。
 日山協主催第一回ジャンパングが十月二十四(土)―二十五(日)小川山で開催。鈴木繁、齊藤健が参加。
 ○カレンダー 年間行事を入れる、写真の解説と山名も入れる。
 群馬県山岳連盟編とする。(須田)
 境町山の会アモリ遠征の状況
 八月二十七日からキャラバンを全員元気で開始した。(川辺)

○小川山
 阿部 小川副会長あいさつ
 ○県民登山大会について
 大会役員の決定、各コース責任者の決定、発表。
 九月二十日にロック・フェスティバルを黒岩で開催したい。
 ○編集部 だいたい嶺邑の発行が遅れているが、メインの原稿も本日も載せた。アンナ遠征についても載せたい。十一月発行予定(羽野)
 ○国体部 日山協で山岳競技新規則基準が出来た。京都国体の下見は十月三十一日―十一月一日に行く。毎月第一水曜日に国体委員会を開いている。(水野)
 ○指導部 九月十二日、十三日に黒岩でロックフェスティバルを行った。十月二十五日に小川山で第一回ジャンパングに群馬独峰会の鈴木繁と群馬登山会の齊藤健が参加する。登山教室は第一回を十月十三日に行かない、一般参加者は十六名、第二回は高崎観音山周辺で読図。第三回は二十四日、二十五日県民登山大会と合同で実施。(高田)
 ○自然保護部 日山協総会に富山、笠原、寺内の三名が参加。谷川岳熊穴沢避難小屋付近を十月十三日に調査した。十一月に榛名山黒岩の清掃を行います。(笠原、富山)
 ○編集部 嶺邑出来上る。内容は、大沢常任理事の「学校と社会と登山者」八木原常任理事の「アンナプルナ南壁登山 境町山の会」アモリ登山成功など。次号はかくされた山は中高山山岳隊は十月二十一日に四名、本隊は十月二十八日に出発予定。ドクターは大橋病院の藤岡俊樹氏(二十九才)をお願いした。
 ○自然保護部 自然保護総会を終る。

○海外登山部 荷物九月十九日、二十日、二十一日に出す。先発隊は十月二十一日に四名、本隊は十月二十八日に出発予定。ドクターは大橋病院の藤岡俊樹氏(二十九才)をお願いした。
 ○自然保護部 自然保護総会を終る。

○山田登と今年スイスのモンテローザに登っている。(八木原)
 ○総務部 十月五日女屋倉淵村に行き打合せ。上毛新聞社から上毛スポーツ賞の推せん依頼。パレーボール協会長太田武史氏御逝去。アンナ登山で県より補助金。(女屋)
 ○群馬の山について 岳連負担分六〇〇部残がある。(川辺)
 ○カレンダーについて 出来上が一部一〇〇〇部。(須田)
 ○境町山の会アモリ峰登山隊 十月十二日に登頂成功。登頂者は金子悦治と高田智博隊員及びシエルバ一名で共同通信からた今電話連絡がありました。上毛スポーツ賞の推せんも同時に承認される。
 ○総務部 県民登山大会参加一六九名。十一月七日、八日「去来荘」で関東地区山岳連盟連絡協議会開催しました。国体関東地区大会担当順について、指導員研修会について。(女屋)
 ○その他 日本登山医学研究会シンポ六十六年六月十一日―十二日水上町「去来荘」で開催。(群馬県担当学会長田中壮佳)
 ○上毛スポーツ賞に境町山の会アモリ峰登頂で推せんする。十一月四日県体協各団体理事長会議出席。
 ○石井副会長十二、脂腸演説で入院
 ○岳連で慶弔規定と表彰規定をつくりたい。総務部担当
 ○境町山の会アモリ登頂祝賀会を十一月二十九日開催(川辺)

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務

○海外登山部 八木原隊長よりアンナプルナ遠征隊準備状況について細部にわたり説明。予定メンバーの報告あり。登山隊事務